

聖書:列王記第二5章1～9節

説教:イスラエルに預言者がいる

はじめに

いつものように先週のあらすじを振り返ります。預言者エリシャは、今で言えば神学校の校長先生をしていて、およそ百人の神学生を預かり、学生たちの食事についても気を配らなければなりません。あるとき、鍋に毒が入っていて食べられなくなると、エリシャは、鍋の煮物をきよめて飲めるようにします。また、パンが全然足りなかったときには、「彼らは食べて残すだろう」と告げて、食べてみたらそのとおりになりました。これが何を意味するのか、そこだけ見えてもわかりませんが、実はエリシャからおよそ八百年後に来られたイエス・キリストのみからだと血潮のみわぎを現していたことが見えてきました。

今日の箇所では、ナアマンという人が登場して、また新たな話が始まります。前回の箇所がイエス・キリストと関係があったということであるなら、今日の箇所ももしかして関係があるのではないかな。そう考えるのが自然でしょう。ナアマンの身に起きた出来事を通して神はなにをを示そうとしておられるのか。今日から三回に分けて見て参ります。

1 ナアマン

1) 主が以前に

1節を読みます。「アラムの王の軍の長ナアマンは、その主君に重んじられ、尊敬されていた。それは、主が以前に、彼を通してアラムに勝利を与えられたからであった。この人は勇士であったが、ツアラアトに冒されていた。」

アラムという国はイスラエルのすぐ北にあり、常日頃いざこざがたえなかったようです。アラムの軍隊がイスラエルに侵入し、食糧や物資だけでなく、人もさらっていくというような事件が起きていました。その略奪隊のリーダーをしていたのがナアマンで、王に重んじられるほどですから非常に優秀な軍人であったようです。

ここで注意していただきたいのが、「それは、主が以前に、彼を通してアラムに勝利を与えられたからであった」というフレーズです。ナアマンはイスラエル人ではないどころか、敵の將軍です。それなのに、主がナアマンに味方し、救いを与えたというのです。これはいったいどういうことかとまどってしまいます。

2) ツアラアトに冒されていた

そのことはいずれまた別の機会に触れることにして、ナアマンが患っていたツアラアトについて触れておきます。以前の聖書では、このツアラアトのところを「らい病」つまり「ハンセン病」のことですが、そのように訳していました。ところがその後の研究で、らい病として知られている病気の症状と聖書の説明が一致せず、らい病と訳すのは問題があることがわかり、結局「ツアラアト」と表記することになりました。そのあたりの事情については、皆さんの聖書の一番うしろのページに記されております。

このツアラアトと呼ばれる病気は、いのちに関わることはないとしても、外見からは皮膚のただれのようなものが見えたようです。聖書の律法によれば、この病気にかかった者は汚れた者とされ、一定の期間隔離されなければならないと定められていました。もちろんナアマンは、異邦人ですからそのような律法に縛られることはありません。とは言っても、いろいろな差別や偏見は避けられなかったでしょう。なんとか治療の方法はないのかとずっと探していたのだらうと思われま

3) イスラエルから連れて来られた娘

そんなナアマンのことを心配していた人がいました。イスラエルから捕虜として連れて来られ、ナアマンの妻に仕えていた一人の娘です。彼女はこう言います。3節。「もし、ご主人様がサマリアにいる預言者のところに行かれたら、きっと、その方がご主人様のツアラアトを治してくださるでしょう。」

この娘から見たらナアマンは、自分が住んでいた村を襲い、家族を苦しめたばかりではなく、自分も外国に無理矢理に連れて来られて、人生をめちゃくちゃにされた憎い敵です。であれば、ナアマンの病気について、たとえ治療法を知っていたとしても何も言わず隠す。それが普通ではないでしょうか。ところが、この娘はご主人の病気のことを心配し、サマリアにいる預言者、すなわちエリシャを紹介するのです。

4) アラム王

ナアマンの病気のことを心配していたのはこの娘だけではありません。もう一人いました。アラム王です。彼は、イスラエルの王に手紙と一緒に銀十タラント、金六千シケル、晴れ着十着を持たせます。今の価値に換算すればおよそ七億円相当にあたるようです。敵であるイスラエルに行って治療させてほしいというのですから、さすがに手ぶらでは行かせられません。それ相当のお土産を持っていなければということでしょうが、それにしても一人の部下のために払う額としては破格です。

イスラエルから連れて来られた名もない娘とアラムの王。立場から言えばまったく対照的です。でももしこの二人がいなかったならナアマンの救いはなかったでしょう。主がこの二人を用いているのは明かです。

2 イスラエル王

1) 「私は神なのか」

ナアマンは早速サマリアに向かってイスラエル王のところを訪問し、アラム王からあずかってきたお土産と手紙を差し出します。そこにはこう書いてある。6節。「この手紙があなたに届きましたら、家臣のナアマンをあなたのところに送りましたので、彼のツアラアトを治してくださいませうに。」

いっけん、なんでもないようなごく普通の手紙に見えます。しかしイスラエル王はこれを読み、ただちに衣引き裂いてこう叫びました。7節。「私は殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。この人はこの男を送って、ツアラアトを治せと言う。しかし、考えてみよ。彼は私に言いがかりをつけようとしているのだ。」

もしナアマンを治せなかったらどうなるか。おそらくそれを口実にしてアラムは戦いを仕掛けてくるに違いない。そうだったわけです。イスラエル王がそんなふうにするのは心がひねくれている、と考えてはなりません。世界の外交というものはこういうもので、裏の裏を読まなければならない。そこは今も昔も変わりません。

ここで注意していただきたいことが一つあります。ナアマンの病気をいったい誰が治すのか、です。イスラエル王はこう言っています。「私は殺したり、生かしたりすることのできる神であろうか。」アラム王は、イスラエル王である自分に直接治すように要求してきた。イスラエル王はそうだったわけです。それが果たして正しかったのか。後で見ることになります。

2) 計略

そこへエリシャの遣いがやってきます。8節。「神の人エリシャは、イスラエルの王が衣を引き裂いたことを聞くと、王のもとに人を遣わして言った。『あなたはどのように衣を引き裂いたりなさるのですか。その男を私のところによこしてください。そうすれば、彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。』」

これこそまさに「渡りに船」で、困っていたイスラエル王はさぞかし喜んだだろうと思うのですが、実はここに一つの疑問がある。

もしエリシャがナアマンを癒やすことができなかったなら、どうなるか。イスラエル王が心配するように、大きな外交問題に発展し、戦争さえ起きかねません。そんな重大な問題をエリシャに任せてよいのかと迷ってもおかしくない。ところが、あっさり任せます。もともとこの二人に信頼関係があったというのならまだわかります。ところが彼らは以前から犬猿の仲なのです。もっとも嫌いな相手に、このような重大な問題の解決を任せたのはなぜか。

おそらく政治家としての彼は、こんなことを考えたのでしょうか。この問題は自分の手では解決できないし、このまま行ったら戦争は避けられない。しかしエリシャに任せたらどうなるか。エリシャがナアマンの治療に成功したら万々歳、すべては丸く収まる。では、もし仮にエリシャが治療に失敗したらどうなるか。それで最悪戦争にはなるかもしれません。でもそうなれば、そのときはエリシャの責任だと言い張ればよい。自分には火の粉は降ってこない。おまけに彼を殺す立派な口実になるではないか。それでエリシャに任せた。転んでもただでは起きない、ということでしょう。

3 神の人エリシャ

1) サマリアの預言者とは誰のことか

ではエリシャはどう考えたのでしょうか。エリシャがもしナアマンの治療に失敗したら、殺される可能性があります。そのことはもちろん考えたでしょう。それなのにナアマンを自分のところによこすようにと告げさせます。

なぜでしょう。エリシャはイスラエル王の前でナアマンはこう言ったのを伝え聞いたはずです。「イスラエルから連れて来て私のところで働いている一人の娘がこう教えてくれました。『もし、ご主人様がサマリアにいる預言者のところに行かれたら、きっと、その方がご主人様のツアラアトを治してくださいませう。』」

サマリアの預言者とは、自分すなわちエリシャ以外に考えられません。外国人であり、敵でもあるナアマンがエリシャの名前を指名して治療を求めてくる。そんなことは通常あり得ません。これには主が働いておられるのを、エリシャは霊的な洞察力で見抜き、ナアマンを呼び寄せます。その目的は、イスラエルに預言者がいることをナアマンが知るために、です。外国人でも主の救いが及ぶことをエリシャは信じています。

では、イスラエル王はどうだったのでしょうか。先ほど見ました。「サマリアの預言者」とは自分のことだと思い込んだ。それで衣を引き裂いてしまった。霊的な目が閉じられているとこうなってしまう。同じ一つのことも見ても、エリシャには主の手が働いていることが見えるのに、イスラエル王は何も見えず、すべてが混乱にしか感じられないのです。

2) 一人の女性の信仰をとおして

今日の箇所、いろいろ起きていますが、元をたどればアラムの国に連れていかれた一人の娘のことばがきっかけでした。この女性、人の目には、奴隷として将来の望みなど持つことが許されな、歴史の片隅に埋もれていく一人の女性にしか見えなかったでしょう。しかし、主はこの女性を用いて、驚くべき救いのみわざをなしてあげていくのです。主がこの女性を覚えておられるということです。主にとって、ナアマンも、奴隷として連れて行かれた一人の女性も、等しく滅んではならない大切なのちなのです。

この女性の信仰については詳しいことは書かれていません。しかし自分にとって敵であり、憎んでも憎みきれないほどの相手ナアマンの病気のことを心配するほどです。敵味方を越えて、人の弱さを見て黙ってられない。そういう人であったようです。

その姿、誰かに似ていないでしょうか。そう、イエス・キリストです。この方にとって私たちは敵であったはずですが、それなのに、私たちが罪で苦しんでいることを心配し、黙ってられない。天から下りてこられて人となられ、どこに救いがあるかを語ってくださいました。最期は、私たちの身代わりに十字架におつきになる。自分の命を省みずに、私たちが救われることだけを願っている、主のあわれみに感謝したいと願います。